

ORIENTAL STUDIES TRIPOS Part I

Japanese Studies

Wednesday 3 June 2009 13.30 – 16.30

J.5 CLASSICAL JAPANESE

*Answer **both** sections and **all** questions*

*Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** Answer Book.*

STATIONERY REQUIREMENTS

20 Page Answer Book x 1

Rough Work Pad

**You may not start to read the questions
printed on the subsequent pages of this
question paper until instructed that you may
do so by the Invigilator.**

SECTION A

- 1 Translate the following **unseen** passage into English, adding notes where you think they are needed. The Japanese headnotes are merely for your reference. Note the vocabulary items at the end [35 marks].

一 荘園の所有者である京都の公卿平安時代、各地の荘園領主は中央の貴族に名目的に荘園を寄進し、自らはその役人として荘園の管理をするという事が多かった。平家が滅びて中央貴族の旧権が復活したという事で秩序の安定の得られた事を示そうとしたもの。なお、実際は当時守護・地頭が貴族の権益を侵しており、ここに書かれているのは違っていた。二 『百鍊抄』に「午時地大いニ震フ。其声雷ノ如シ。震動之間、巳ニ時刻ヲ送ル。宮城ノ瓦・垣并ビニ京中ノ民屋、或ハ破損、或ハ転倒、一所トシテ全カラズ。法勝寺阿彌陀堂顛倒ス。九重塔破損ス。山姥記」にも被害を記し、得長寿院の転倒を記す。その他諸記録にこの大地震が見え、特に『方丈記』の記述と『平家物語』とは、類似が多い。(延慶本が最も「方丈記」と近い) 三 中国で畿内という語。ここでは「白河」と色の対比という効果も考えている。四 京都市左京区岡崎にあった法勝寺・尊勝寺・田勝寺・最勝寺・成勝寺・延勝寺の六寺。法勝寺にあった九重の塔。玉葉には「法勝寺九重塔、心柱ハ倒レズト雖モ、瓦已下皆震動、成ノ無キガ如シ」とある。元和版「振落ソシ」正節本「ゆり落し」。自然とくずれただけでなく、ある力が働き崩壊したことを示す。以下、この種のいい方が続く。モ京都

大地震

平家みなほろびはてて、西国もしづまりぬ。国は国司にしたがひ、庄は領家のままなり。上下安堵しておぼえし程に、同七月九日の午刻ばかりに、大地おびたたくうごいて良久し。赤鼻のうち、白河のほとり、六勝寺皆やぶれくづる。九重の塔もうへ六重ふりおとす。得長寿院も三十三間の御堂を、十七間までふり倒す。皇居をはじめて、人々の家々、すべて在々所々の神社仏閣、あやしの民屋、さながらやぶれくづる。くづるる音はいかづちのごとく、あがる塵は煙のごとし。天暗うして日の光も見えず。老少共に魂を消し、朝衆悉く心をつくす。又遠国近国もかくのごとし。大地さけて水わきいで、磐石わかれて谷へまるぶ。山くづれて河をうづみ、海ただよひて浜をひたす。汀こぐ船はなみにゆられ、速ゆく駒は足のたてをうしなへり。洪水みなぎり来らば、岳にのぼつてもなとかたすからさらむ。

question continues

市左京区聖護院あたりにあった寺千体観音堂で、今の三十三間堂はこれならつて後に建てたもの。へ底本「ふりたうす」。元和版「海倒」。へ底本よりがななし。正節本は「衆」に清音の記号を付し、元和版「衆」に濁点を付す。朝廷に仕える者と一般民衆と。屋代本・熱田本・延慶本「鳥獸」とある。あるいは「鳥獸」がよいか。「山」は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土裂けて水涌き出で、崩れて谷にまろび入る。なぎさ漕ぐ船は波にたどよひ、道行く馬は足の立ち処を惑はす。「方丈記」。二底本「盤石」。一底本は当時「盤」と混用した。元和版などによる。二海水が揺れ動いて、地震による津波をいう。屋代本「海傾」。三高良本「ギハ」。元和版・正節本「落」。屋代本「奥」。二「岳」にのぼつても「河をへだてても」の「も」は、大地震の際にはそうならない事をいうための語。

一 元和版・屋代本など「暫」。二「さりぬべし」の音便。「さり」は避ける意。三人間の力の及ばない絶望感を表わす語。大地震は底本「大地震」。以下同じ。四よみは熱田本などによる。元和版リウ。五底本「四大衆」。元和版・正節本・屋代本などによる。仏教で宇宙いっさいの物体を構成する元素とされる、地・水・火・風。「中」を元和版・正節本・熱田本ナカ、屋



て、泣きかなしむ事限なし。法皇はその折しも、新熊野へ御幸なつて、人多くうちころされ、触穢出でなければ、いそぎ六

猛火もえ来らば、河をへだてもしほしもさんぬべし。ただかなしかりけるは大地震なり。鳥にあらざれば空をまかけりがたく、龍にあらざれば雲にも又のぼりがたし。白河、六波羅、京中にうちうづまれて死ぬる者、いくらといふ数を知らず。四大種の中に、水火風は常に害をなせども、大地においてはことなる変をなさず。こはいかにしつることぞやとて、上下遣戸、障子をたて、天のなり地のうごくたびごとには、唯今ぞ死ぬるとて、声々に念仏申し、をめきさけぶ事おびたし。七八十、九十の者も、世の滅するなンドいふ事は、さすが今日あすとは思はずとて、大きに驚きさわぎければ、をさなき者共も是を聞いて、泣きかなしむ事限なし。法皇はその折しも、新熊野へ御幸なつて、人多くうちころされ、触穢出でなければ、いそぎ六

question continues

(TURN OVER)

代本ウチとよむ。六底本「遣」の字にゲンとふりがな。引戸。七屋代本・熱田本「八九十」。八元和版は、この前に「常ノ習ヒナレ共」の一句がはいる。九「玉葉」に「法皇今熊野ニ御参詣、此事ヲ恐ルルニ依リ、忽ニ出御セラル」とある。新(今)熊野は、永暦元(二〇〇)年、後白河法皇が熊野権現を勧請され、京都市東山区内に建てた社。一〇死者が出たため、その穢れに触れること。穢れに触れると、神事は行なえなかつた。二元和版・熱田本・延慶本「六条殿」とある。「六条殿」は後白河法皇の宿所であった所。三「玉葉」に「主上御池中島ニ渡御ス云々。其ノ後又南庭ニ幄ヲ打チ、御在所ト為ス」とあり、「山槐記」「百鍊抄」にも同様な記事がある。四「玉葉」に「院御所破損殊ニ甚シク、大幄寝殿傾キテ危ク、御所為ラザル之間、北ノ對ニ御坐ス」とある。なお、延慶本には「今夜ハ南庭ニ幄ヲ立テ主上渡セ給フ」とあり、そのほうが「玉葉」などの記述に合う。元和版ではこの文が「主上は……」の前にあり、それなりに整った文脈になる。一四「屋根に幕を張っただけの仮の家屋。一五底本「ふりたをしければ」。熱田本振倒シテケレハ」。一六「陰陽寮に属し、天文の諸現象の観測にあたった官。異変のあった時はそれを検討し上奏する。この時は安倍広基。一七今夜。亥は午後十時頃、子は午前零時頃。一八「転覆するだらう。「うち」は強めの接頭語。



に幄屋をたててぞましましたける。女院、宮々は御所ども皆ふりに倒しければ、或は御輿に召し、或は御車に召して出でさせ給ふ。天文博士ども馳せ参つて、「よさりの亥子の刻には、かならず大地うち返すべし」と申せば、おそろしなンドもおろかなり。

波羅殿へ還御なる。道すがら君も臣も、いかばかり御心をくだかせ給ひけん。主上は鳳輦に召して、池の汀へ行幸なる。法皇は南庭

法皇 Retired Emperor Go-Shirakawa
 主上 The (new) Emperor
 女院宮々 The Emperor's mother and the Imperial Princes

'Daijishin' from *Heike monogatari* (1965), Chapter 20 (NKBZ, vol. 30), pp. 449-52.

